

上智大学文学部教育学科紀要

1996年3月25日 印刷
1996年3月31日 発行

上智大学教育学論集 30

編集代表者 高 祖 敏 明
武 内 清

印刷者 原 野 幸 康

発行者 ☎102 東京都千代田区紀尾井町7-1
電話03(3238)3650
印刷所 ☎134 東京都江戸川区南葛西7-2-4-514
電話03(3686)5706

上智大学文学部教育学科
(株) 近代印刷センター

アメリカの教育事情

—Madison(WI)での見聞, 体験を中心に—

武 内 清

はじめに

私は、上智大学サバティカル、在外研究の機会を得て、1994年8月24日より1年間、 ウィスコンシン大学マディソン校 (University of Wisconsin-Madison)、カリキュラム・教育学科 (Department of Curriculum and Instruction) で、客員研究員 (Honorary Fellow) として、1年間研究生活を送ることが出来た。家族と共に、大学からバスで約10分のコンドミニウムに住み、二人の娘 (5学年、7学年) は現地校に通い、妻は小学校にボランティアとして通い、さまざまな出会いや体験をした。その時の見聞をもとに、アメリカの教育事情について報告したい。もとより、アメリカは広大な国であり、私のマディソンでの1年間という短期間の見聞、体験をアメリカの教育として一般化するつもりはない。アメリカの一都市から見た教育事情という意味であるが、文献も参照しながら、1年間のアメリカ滞在を記録にとどめたい。

長期の海外滞在が初めての、私および私の家族が、無事、快適な生活を送ることが出来たのは、受け入れを快諾して下さった、U.W. のポプケヴィッツ (Popkewhitz) 教授、およびその仲介をしてくださった加藤幸次上智大学教授のお陰による。深く感謝したい。

私の在外研究の目的は大きく4つあった。第一は、高等教育研究の一環として、アメリカの大学の学部、大学院の講義、ゼミの様子を知ること。アメリカの高等教育はいま世界一といわれている。その最先端の講義内容、講義の前に配られる充実したシラバス、私語のない講義、活発な討論といわれるものをこの目で確かめ、日本の大学との比較をしたかった。第二は、私の専攻分野である教育社会学、学校社会学、学生文化研究のアメリカでの第一線

の研究成果を知ること。第3は、アメリカの初等、中等教育の実際を観察し、日本の学校との違いを確かめること。第4に、旅行者としてではなく、生活者として暮らし、アメリカの人の生活様式を知ること。これにはアメリカの視点から、日本や世界を見ること。外から日本という国、そして日本人というものを考えるということも含まれる。このような私の当初の目論みは、私の語学力の不足ほかの事情から百パーセント達成されたいとはいえないが、数多くの発見があった。

1 マディソン (Madison) での生活

私はこの歳になるまで(在米当時51歳)、アメリカへの短期の旅行は過去に2度ほどあったが、1年という長期、しかも家族同伴での海外生活は初めての体験であり、無事1年過ごせるかという不安はあった。1994年8月24日、午後5時45分発のU.A.で成田空港を発った。約11時間の飛行の後、大都会のシカゴ空港に着き、そこで小さな飛行機に乗り換えて、約40分足らずでマディソンの空港に着いた。マディソン空港は、小都市のこざっぱりしたところで、降りたった人たちは知的な雰囲気白人が多いという印象であった。預けた荷物(私の書類と衣類が入っていた)がひとつ見つからず、アメリカ生活の前途多難さを思わせた。(航空会社はその日のうちに自宅まで届けてくれたが)

日本の研究者が海外で生活を送るうえで、最初の苦労は家探しであろう。日本でも、未知の土地での家探しは大変である。ましてや外国の生活習慣も、言語の違う所での家探しは、家族同伴の場合一層困難となる。渡航前読んだ研究者の留学記にも、その苦労がいろいろ綴られていた。

「家さがしは、どうやってはじめるのか。わたしは、正攻法で新聞広告にたよることにした。わたしたちは、少なくとも三寝室、というのを条件とした。そして、そういう条件をみたしてくれるものだけを広告のなかから選り出して、電話で照会し、それぞれについて時間を約束し、二日にわたって視察に出かけることにした。レンタ・カーを借り、地図を片手のドライブである。」(加藤、1978年)

「このアパートは、決して理想的な住居ではなかった。そこには、私の勉強部屋というものがなかった。安っぽいニス塗りの床のむき出しになったアパートがアメリカというもの——幾多の開拓者を呑み込む清浄な空白として出発したアメリカという現実の私たちにとっては日常的な象徴と見えた」(江藤、1972年)

「私達がたどりついたその家は、彼女がイギリスの生活ということで心へえがいていたものとは少し違っていただ。私たちの家はずっと日本の団地に近かった。くたびれた絨毯、シートがボロボロになった椅子」(中岡、1982年)

マディソンでもなかなか住むところが見つからない日本人留学生や、借りた部屋の隣の学生の連夜のドンチャン騒ぎに日夜悩まされている日本人院生の相談を受けたことがある。しかし、我々は、幸運なことにこの家探しの悪夢を経験しないですんだ。マディソンに1年前より滞在中の加藤教授と奥様が、快適なコンドミニアムを探しておいて下さった。それは、広い公共の公園に隣接の8階建てのコンドミニアムの4階の角部屋で、広さは15畳相当のリビングも含めた2LDKで、クリーニング済みのきれいな絨毯と真っ白な壁に囲まれた清潔で広々とした部屋であった。大きな窓からは広い前庭と木々、その先にバス停と免許センターの建物、隣のコンドが見え、見晴らしのよい眺めを1年間満喫することになる。部屋の家具、つまりテーブル、椅子、ソファ、マット、布団、毛布、スタンド、机、といったものも、着いた日のうちに、近々帰国する日本人研究者から安く譲ってもらうことが出来、加藤教授の奥様が揃えて下さった日用品と合わせて、あっという間に、生活の準備が整った。これまでアメリカへ移住した人々が、最初の土地でどれほど苦労したかということを見ると、申し訳ない気持ちであった。

我々の住まいは、24時間営業のセントリーショッピングストア、高級デパート(マーシャルヒルズ)、約30の専門店が入ったヒルデイルのショッピングモールにも徒歩5分、U.W.の大学にはバスで10分、小中学校には徒歩で10分というきわめて便利な所であった。それでも、ここはダウンタウンから離れた閑静な住宅地であり、公園の先にはアメリカらしい広く大きくきれいな

一戸建ての住宅が続いていた。隣接の広い公園は、青々とした芝生で覆われ（春はタンポポで黄一色、夏は蛍が飛びかい、冬は雪の銀世界）、よくフットボールあるいはサッカーをする若者たちを見かけた。テニスコートも6面あり（夜間照明つき、無料）ここで、私はその後、毎日曜日の朝、留学中の日本人研究者、院生、そして韓国、ロシア、アメリカ人の知り合い（皆U.W.の院生）とテニスをやリ、ビールで喉を潤し、研究の情報を交換したものである。

このように便利で快適なコンドが月680ドル（暖房、水道料込み、日本円で約7万円弱、前庭の駐車場の料金は無料）と、アメリカの生活のしやすさを物語っていた。当時、円高のせいもあって（1ドル=90円）、すべて物価は、日本の半額位の感じがしたウィスコンシン州の公立4年制大学のフルタイムの教授の平均年収は4679ドルである（The Almanac of Higher Education, 1994）。その後購入した2000ccの車（中古のアメリカ車）のガソリンを満タンにするのにいつも15ドルあれば充分であった。娘達の英会話の個人教授（U.W.の大学院の卒業生、院生、学生）の時給は10~12ドルであり、一般の学生アルバイトは5~7ドル程度であった。日本人の留学生に聞いたところ、学生用のアパートに住み、1ヶ月の生活費は5~600ドル（家賃含む、授業料除く）で可能だということであった。学生だけでなく、その後知り合いになったアメリカ人の生活は質素で、それでいて、生活の質は豊かであるという印象を受けた。マディソンおよびその郊外には、豊かな自然、川、湖、森、広い公園が沢山あり、ドライブ、キャンプ、ピクニック、カヌー、ジョギング、スキー、スケート、水泳と、ほとんどお金をかけることなく、楽しむことが出来る。各自が食物や飲み物を持ち寄るポトラックのパーティが、一般的であり、日本のような交際費、飲み代がほとんどいらぬ。

学期の終わりには、教授の家で、大学院のゼミの打ち上げが、ポトラック形式で開かれるのが恒例のようで、私もポブケヴィツ教授や、アップル教授宅のパーティに参加させてもらい、楽しいひとときを過ごした。

ポトラックではない、もう少し正式なディナーにも数多く招かれた。U.W.のポブケヴィツ教授、タバチニ（Tabatini）教授、プライス（Price）教授、

シュメツケ講師、娘の学校の校長先生（Gardner博士）、ピアノの先生、韓国のヴィズティングスカラー、妻の友人、日本人の知り合い等々。最初ディナーに招待された時、それは私だけなのか、妻や子どもも含まれているのかわからず、失礼を承知で聞き返したものであった。それらはほとんど家族ぐるみ、あるいは夫婦同伴の会であった。そのお礼に、我々の家にもよく来てもらった。日本では、仕事仲間や学生院生と外で一緒に飲んだり食事したりすることはよくあっても、このように家族ぐるみでのつきあいはほとんどない。

マディソンは、ウィスコンシン州の州都で、ヨーロッパ調の古風で立派な議事堂が、町の中心にあるが、人口は約20万人の大学町で美しい湖に囲まれ、ウィスコンシン大学マディソン校の名声（1982年の全米大学院ランキングでは第10位、中山、1994年）もあって、全米および世界から学生、院生、研究者が集まっている。そのような、国際的な町ゆえ多様な人種が集まっている。それでも大都会ではない大学町のせいか、治安はよく、アメリカでも住みやすい町の上にランクされている。真夜中近くでも、大学に近接のダウンタウンを女子学生が歩いている姿をよく見かけた。スーパーのレジの人が、必ず、「Hi-」と挨拶してくるので、こちらも自然に挨拶を返すようになる。最初、この「Hi-」という挨拶を含めてとても親しげなアメリカ人の態度をどう解釈すればよいのか迷った。それは、藤原新也の「あれは人間相互の親密のゆえに発生した種類のものでなく相互が親密でないことによって発生したアメリカ国固有の奇習ではないか」という本の一節（藤原1990年）が心に残っていたからである。しかしこのマディソンでの生活は、藤原新也の洞察を否定する結果になった。もちろん一時住まいという気軽さやお互いに外国人という気楽さもあったのだろうが、人々の親切心は本物とを感じる場面がさまざまあった。

大きなスーパーマーケットや、ショッピングモールは、住まいから車で約10分、ダウンタウンからでも15~20分くらいの郊外に、多く位置していた。よくいったウエスタンモールは、3つのデパートと約50の専門店よりなり、いつも買い物客で賑わっていた。さらに大衆的なショッピングモールも近くに多数あった。新刊本が半額以下で売っている比較的大きな書店も郊外に3軒あり、

社会学や教育学の本も半額以下で手に入れることができた。

同じウィスコンシンの中でも、大学町で人種の多様なマディソンと、その郊外で白人の多い地域では、人々の様子や学校の様子は違っていた。郊外の白人の多い地域のレストランに家族で入った時は、じろじろ見られている様で緊張した。それは、ちょうど藤原新也の次のようなアメリカ体験と重なる。

「ドアを開け、一歩中に足を踏み込もうとしたとき、異様な空気を感じたのだ。店内のテーブルに座っている多くの人々が、一斉にこっちを振り向いたのである。客はみな白人だった。冷やかな視線がこちらに向かってくる。最初に思い当たったことは、町のカラーを私が乱しているということだ。カラーとは皮膚の色のことである。この新興の町は一つの色によって塗りこめられていた。」(藤原, 1990年)

アメリカ人(白人)ばかりの郊外の学校には、ESL(English as Second Language)のクラスは設けられていない。ESLクラスはマディソンの小中学校に完備し、うちの娘達は大変お世話になった。オープン・スクール(Open school)は、マディソンの小中学校には少なく、裕福な郊外の学校に多くみられた。アメリカでは公立の教師の給料も地域によって違っている。

マディソンから大都会のシカゴまでは、車で2時間半、ミルウォーキーまでは1時間半の距離であるが、人々は(とりわけ子どもたちは)あまり出かけている風ではなかった(これまでに、シカゴには、2、3度しかいったことがないというアメリカ人の院生もいた)。アメリカ人にとって都会は憧れの所ではなく、仕事のため仕方なくいくところであり、自然豊かでのんびりした所で過ごせるにこしたことはない、という意見を何人から聞いた。

最初に述べたように、マディソンの事例を一般化することは出来ない。多様性(diversity)、地域主義(local)がアメリカの特質である。日本の主権の移動は、国民→政府→都道府県→市町村という形で、下から一挙にトップに上がり、そこから下に降りてゆき、すべてが画一的になるのに対して、アメリカでは、主権をもつ市民がその主権の一部を州政府(state government)へ委譲し、州の政府が、その権限の一部を連邦政府(Federal government)に委譲し、各州の優位性が保たれている。(秋間, 1991年)

2 U.W.の大学教育、大学生活について

ウィスコンシン州には1994年統計で、大学・短大は全部で64校ある(その内公立4年制大学13校、私立4年制大学29校、他短大)。その中でもウィスコンシン大学マディソン校は学部数も学生数(1991年秋に43,030名、全米第5位)も最大であり、優秀な教授陣が揃い、入学も難しく、優秀な学生が集まっている。

マディソン日本人の会には、約200名が属しているが、日本からの留学生は大都市指向が強いのか、U.W.にはそれほど多くない。日本からの留学生より韓国、台湾、中国からの留学生をよく見かけた(外国人学生は4,014名で、全体の9.8%)。日本からの留学生は、交換留学の学生(上智、慶応、南山)、1年から入学あるいは他のアメリカの大学から転学してきた正規の学部生、日本の大学あるいは大学院を卒業した院生たちで、みなよく勉強していた。

(マディソンのある英語学校には、日本人の学生は多く来ていたが、アメリカの大学への入学をめざして一生懸命勉強している一部の学生を除き、雰囲気は全然違っていた)

最初に述べたように、私の渡航の目的の第一は、アメリカの大学の学部、大学院の講義、ゼミの様子を知ること。最先端の講義内容、充実したシラバス、私語のない講義、活発な討論をこの目で確かめることであった。普通、日本からの大学院の留学生の場合、1科目の受講料は20万円近くかかる(外国人の院生で3単位は2194ドル、Residentは724ドル)。その点、私の場合は、授業担当者の許可さえ得られれば、受講料を払うことなく受講が可能になる。そこで、授業の時間割をしばし眺め、使用される教科書を大学の教科書売場で確かめながら、8月末から始まる秋学期にとる科目を検討した。各科目には難易度によって100番台から900番台迄の番号がついている。中頃の番号の授業は学部生も院生も受講することができる。このような学部、大学院共通の受講科目も沢山存在する。私は、学部、大学院合わせて5つを選び、それを聴講することにした。(次の春学期は、最初4科目聴講し、途中から3科目に減らした)1週間に5教科という数は、日本の大学での経験からいって、それほど多くないと思われた。ところが、実際は、1時間15分が1コマで、

週2回の授業が標準的な授業(週3回もある)であり、大学院の週1回のセミナーは、2時間半と長く、5科目というのは、課題の文献を読んでいくことも含めるとかなりハードなスケジュールであることがすぐわかった。

日本の大学では、定刻より多少遅れて、講義が始まるのが通常であろう。U.W.では、時間に遅れてくる教員は皆無で、学生のみならず教員も時間前にきて、ベルと同時に講義が始まるのが、普通であった。一度だけ、担当教員が5分遅れてきたことがあり、その時は、教員が学生に平謝りであった。平均的な講義時間である1時間15分は、教員も学生も講義に集中するちょうどよい時間であり、教員のテンションは高く、どれも密度の濃い講義が展開されていた。もっとも、教員の1週間の持ちコマ数も、1~3コマと少なく、講義に集中できるのである。

シラバスは、日本の大学の講義要綱のようにあらかじめ冊子になって配られるものとは別に、最初の授業で配られる。A4の紙に、数ページに渡るのが普通で、各時間のテーマと必読参考文献(reading assignment)があがっている。必読参考文献は、学部生用図書館(college library)にリザーブされており(3時間限度の貸し出し)と大学の教科書売場(教科書売場だけで上智大の購入の3倍ほどのスペース、東大本郷の書籍部より広い)、に置かれている(used bookの売買もしている)。シラバスには、成績評価の仕方についても詳細に書かれていて、『シラバスは教育サービスの「売買契約書」としての意味をもつ』(荻谷、1992年)ということがわかる。オフィス・アワー(office hour)も、週2回、2時間程度書かれている。

授業のすすめ方は、必読文献を前提にしながらも、それと独立の講義がなされる場合と、必読文献についての要約と討論(group discussionが多い)がなされる場合がある。学生の受講態度は、熱心で、講義内容をノートにきちんととっている学生が多い。私語はどの教室でも皆無。少しでも疑問があると、黙って挙手して、先生からの指名を待つ。学生の挙手に教員は少しもあわてず、話をつづけ、話がひと区切りついでからその学生を指名し、質問に、手短かに答える。

学期中は、学生はよく勉強している。週末は息抜きをするにしても、平日

はあまり遊んでいないようであった。テキストの講読、小テスト(クイズ)、中間試験、期末試験(paper 提出が多い)への準備で、忙しい。成績は、進級や大学院入学や奨学金にひびくし、大変気にしている。合間をぬって、アルバイトやボランティア活動もしている。(U.W.のキャンパスに近接の教会のInternational Friendship Centerには、週2時間ずつボランティアで来て、外国人の英会話の相手をしてくれるU.W.の学生が数人いた。私と妻は英語で大変お世話になった。教会主催のイベントでは、娘達もお世話になった)授業評価は、最後の時間に、教員が席を外して行なう。

図書館は朝早くから夜遅く(11p.m.)まで開いている。試験前は、オールナイトで開館。検索のコンピューターが至る所にあり、検索で、文献がすぐ近くで探せるのは、便利であった。雑誌論文が、コンピューターで検索して、CDROMよりすぐコピーできるのには、感激した。日本の文献も文学や社会科学を中心に多数あり、日本語で読む小説にこと欠かなかった。

パートタイムの学生も多く、統計によると、全米でその割合は学部43.5%、大学院で60.8%におよぶ。学生たちのみならず、教授たちの服装もカジュアルで、男性では背広やネクタイを締めている人は、めったに見ない(私の聴講したクラスの担当者では、唯一「日本の政治」担当のペンベル教授が毎回きちんとした背広とネクタイを締めていた)。女子学生もワンピース、スーツ、スカート姿は少なく、カジュアルでGパンや半ズボンのもが多い。

学生の全国組織であるフラタニティ(fraternity)やソロリティ(sorority)に所属する学生の割合は、U.W.では他の大学に比べ少ない方で、1~2割程度である。それらに入会するにはメンバーによる面接があり、許可されれば同じ建物に住むことになる。その学生たちは、勉強より遊びが好きで、徒党を組んで遊び回ることが多い。U.W.のもそういった学生たちの住む一角があり、いつも学生たちのパーティの歓声で賑わっていた。白人学生がほとんどで、それ以外の学生たちはそこ一角は通りにくいと、日本人学生は感想を述べていた。

卒業式(commencement)は、6月に行われる。卒業生は多いため、学部毎にイベントホールのようなところで開かれていた。学生たちは黒い帽子とガ

ウンとを全員はおってうれしそうであった。親や知り合いも多数参加していた。卒業式では、学長あるいは学部長の祝辞と代表者への卒業証書の授与、それに音楽隊の演奏があり、最後は、音楽にあわせて踊りだす場面も見られた。

4 大学のシラバスと講義内容

私が1994年9月からの秋学期に聴講した5つの科目と、1995年の1月からの春学期に聴講した3つの科目のシラバスとその授業内容について、一部紹介しておこう。

教育政策学科 (Educational Policy Study) 300番

科目名 学校と社会 (School and Society), 担当 シュメツケ講師 (A. Schmetzke), 火曜, 木曜 11:00~12:15, オフィスアワー 火曜, 木曜 12:15~1:15

[コース概要]

この入門コースは、教師をめざす人に、アメリカの公立学校の役割について教えるものである。学校の社会的役割について考察したあと、次のような特定のトピックに焦点をあてる。学校教育と機会の平等、多文化社会における教育、障害をもつ子の教育、学校組織と統制、学校の法的側面、専門職としての教職

[コースのすすめかた]

このクラスでは、講義と討論を組み合わせる。U.W.の他の学部や教育委員会からゲストを招き、講義と討論を行なう。

[コースの要求事項]

- 1 きちんと出席し、クラスの討論に活発に参加すること。
- 2 課題の論文や文献の指定された箇所を、あらかじめ読んでおくこと。コメントと質問を用意して、クラスに参加すること。
- 3 ノートを用意し、課題の文献の要約とコメントを、自分の言葉で書くこと。

4 試験は、中間試験と最終レポートによる。両方とも、課題文献とクラスの討論で出てきたトピックからなる。中間試験の時、自分のノートを参照してよい。

[成績評価]

それぞれ2つの試験は30%。ノートは学期中に4回点検し10%ずつカウントする。

[教科書、参考書、論文]

J. SPRING AMERICAN EDUCATION M. H. 1994. 以下文献リスト (省略)。

[月日 トピック]

- 9/1 コースの概要 (それぞれ文献が記載されている一省略, 以下同じ)
- 9/6, 8, 13, 学校の社会的機能
- 9/15, 20, 22 教育機会と社会構造—社会階級, 人種と民族 トラッキング
- 9/27, 29, 10/6, 11, 13 多文化教育—論争点, 共通文化対エスノセントリズム, アフロセントリズム, 仲介の立場 (ゲスト招聘)
- 10/20 中間試験
- 10/25, 11/1 多文化教育—アメリカンインディアン (ゲスト招聘)
- 11/3 多文化教育—ウィスコンシンの学校の民族的多様性 (ゲスト招聘)
- 11/8, 10, 11/15, 17, 22 Disability と学校
- 11/29, 12/1 学校組織と統制—連邦, 州, 町村
- 12/6, 8 学校の法的側面
- 12/13, 15 教職
- 12/23 最終試験 (レポート提出期限)

このクラスは、教育学部2年生を対象とした、ゼミ形式のものである。同様の科目名のクラスがほかに5つあり、学生は小人数(20数名)に分かれ、教師からの講義と討論で、教育と社会に関する基本的な見方を学んでいく。担当のシュメツケ講師は、サバティカルの教授の代理であり、博士号を取得したばかりの、若いドイツ人である。講義の内容は、日本の教育社会学の概

論にも近い。しかし、人種問題や多文化教育にも多くの時間を割いているところに、アメリカ的特徴が見られる。それに関連してトラッキングについての議論も多い。ディスアビリティの教育にも多くの時間が割かれているのは、シュメツケ講師の専門(特殊教育)による。学生たちは毎時間、クラスの前に、課題の文献(一冊の本と、36の論文の入ったリーディングバック)の指定箇所(毎回50~60頁程度)を読んで、その要約とコメントを自分のノートに記入して、出席することが、義務づけられている。ノートの提出、添削が学期中4回ある。学生たちも大変そうだが、それに目を通し、コメントを細かく記しているシュメツケ講師の苦労も大変である。講義は、文献に比較的そってなされた。討論は、2回に1回ぐらいの割合で、後半の時間を使って行なわれ、全体で議論するときと、4~5人の小グループに別れて、行なうときが半々であった。全体の討論の時は、自主的発言が多かったが、だいたい決まった4~5人が発言することが多かった。議論は、2年生のせい、理論的というより、自分の体験に基づいたものが多かった。また、U.W.はラディカルな雰囲気にも充ちたところであり、このクラスでも、トラッキングや多文化教育を扱うときも、弱者やマイノリティの立場に立って論じるということは一貫していた。黒人の学生の入学に反対する南部の州の大学に対して、ケネディ大統領が連邦の軍隊を派遣して、黒人の学生の入学を助ける(強行する)ビデオを見ての討論では、いかに昔は南部でひどい人種差別政策がなされていたかということに学生の意見が集中し、シュメツケ講師も満足そうであった。私は、江藤淳のような次の一説、「合衆国の州というものが、連邦から分離しようとする根強い遠心力を秘めている、逆にいえば、この遠心力に抗して法の執行のためには大学と町の軍事占領も辞さないという連邦政府の、強力な求心的意志の存在」『この国で「正義」をおこなっているのは、ほかのなんであるよりも、力であった』(江藤、1972)が思い浮かんだ。しかし、そのような意見は出されなかった。クラスに出ているのはひとりのアフリカンアメリカンの学生と私を除き全員白人で、人種差別と教育に関する議論は、進歩的ではあるが、多少タテマエ的にも聞こえた。そのアフリカンアメリカン女子学生が発言したり、休み時間に、他の学生と話す姿はあまり

見られなかった。しかし、これだけの、文献を読みこなし、講義、討論参加することによってえられる知識の量は、膨大なものである。日本でも、アメリカの大学のような膨大な文献リスト付きのシラバスを作り、文献講読のチェックもして、体系的な講義と、活発な討論を組織し、課した論文にはコメントもつけ返却したら、学生の学力はさぞ高まるであろうと感心した。当のシュメツケ講師は、期待値が高いのか、勉強しない学生が多くて困るとこぼしていた。シュメツケ講師に私は、お昼をご馳走になったり、家でのパーティに呼んでいただいたり(非常勤の職で、質素に生活している知的なU.W.の講師達が多く集まっていた)、カヌー乗りに誘っていただいたり(ウィスコンシンリバーをのんびり5時間かけて下り途中の島でピクニックをした。カヌーは、ピックアップ料金を含め一艘18ドルであった)、大変お世話になった。

社会学(Sociology) 648番、科目名 教育社会学(Sociology of Education)、担当 ガモラン教授(A. Gamoran) 火曜、木曜 1:00~2:15、オフィス・アワー、火、木 4~5時

[シラバス 概要]

なぜ、みな学校へいくのであろうか。なぜ学力差は生まれるのか。アメリカの学校は資本主義体制の維持にどのように貢献しているのか。アメリカの学校がさらに効率的になるのにはどうしたらよいのか。

以上のようなことを、このセミナーでは検討したい。最初に、社会の類型と教育のシステムとの関係を検討する。つまり、アメリカの近代の学校体系の起源を、国際比較も含め検討する。学校と社会階層との結びつきに注目し、なぜ学校が社会移動を促したり、既存の社会階層の再生産に寄与したりするのかを明らかにする。次に、学校教育の効果について検討する。特に、生徒たちの学校での経験と学校から得るものとの関係を明らかにする。最後に、現代の教育改革について、社会学的考察を加える。

10月27日に中間試験、12月6日までにタームペーパーを提出し、最終試験を受けること。評価はタームペーパーが40%、それぞれの試験が30%ずつによる。

受講者は、それぞれの日の課題図書をあらかじめ読んで出席すること。それらは、大学の書籍部で購入可能。コピーパックは社会科学コピーセンターで購入可能。学部生用図書館にも用意されている。

次の文献は必読である。

J. Karabel and H. Halsey. Power and Ideology in Education. N. Y.: Oxford U. P. 1977. (以下文献省略)

月日 シラバスと課題図書

- 9/1 導入
- 9/8 I 社会的制度としての教育
A 教育と社会変動
- 9/13 B 伝統的社会の教育
- 9/20 C 近代社会の教育拡大
- 9/22 D 教育と政治的発達
- 9/23 ディスカッション(巨視社会学と教育)
院生: 12時~2時, 学部生 3時~5時
- 9/27 E アメリカにおける近代学校の起源
- ~10/4 1) 資本主義 2) 学校組織の構造
- 10/7 ディスカッション(学校教育の構造)
II 教育と社会階層
- 10/11 A 地位達成
- 10/13 B 学校から仕事へ
- 10/18 C 教育, 人種, 民族
- 10/20 D 教育とジェンダー
- 10/21, 25 ディスカッション(教育と不平等)
- 10/27 中間試験
- 11/1 E 社会的, 文化的再生産
- 11/8 F 学校体系における成層 G 学校と学級における秩序
- 11/10, 11 ディスカッション(トラッキング論争)
III 教育効果

- 11/15 A 規範的社会化 1) 学校と社会規範 2) 道德教育
- 11/17 B アchievement
- 11/22 C 教授と学習
- 11/29 D 制度的効果
- 12/1, 2 ディスカッション(教育の生産性)
- 12/6 タームペーパーの締切
- IV 現代学校改革
- 12/6 A 学校, 地域社会, 学校選択
- 12/8 B 国の基準と学習機会
- 12/13 C 学校改革
- 12/15, 16 ディスカッション(学校改革)
- 12/19 最終試験

U. W. では、教育社会学(Sociology of Education)というタイトルの科目は、1994年の秋学期はこのガモラン教授のものだけであった。(次の春学期には大学院生用の教育社会学セミナーを、メッツ教授が開いていた)1時間15分の講義が週2回あり、ガモラン教授は、いつも定刻に来て、時間いっぱい熱弁をふるっていた。5回がディスカッションのクラスにあてられていた(学部生と院生は時間が別)。番号が、600番台と中間のため、受講者は学部生と大学院生が半々という感じで、約60名の学生、院生が出席し、熱心にノートを取りながら聞いていた。学生からの質問や意見も多く出て、その質問に、話が一段落してから、次々と答えていく。その答え方は見事で、比較的短い回答で学生は納得するケースが多かった。ガモラン教授は、社会学部の所属で、その内容も、日本の教育社会学に近く、教育学というより、社会学の意味合いが強く、アメリカの現代の教育問題や教育変革をテーマにしながらも、実践より社会学的分析に力点が置かれていた。講義のテーマは、シラバスでわかるように、現代社会と教育、資本主義と教育、社会階層と教育、人種、ジェンダーと教育、社会的文化的再生産、トラッキング、社会化、学校組織、現代の学校改革など、マクロおよびミドルのものが中心であった。

日本の若い教育社会学研究者に人気のあるエスノメソロジーの話や、ポストモダンの言説研究は出てこなかった。日本でよく引用されるマイヤー (J. W. Meyer) については、政治的発達と教育効果のところでは文献をあげ、説明が簡単であった。全体的には、ガモラン教授は、J. S. Coleman や R. Dreeben に近い志向をもつ社会学者という印象をもった。

教育政策学科/社会学 908 教育社会学セミナー、教師研究への社会学のアプローチ 担当 メッツ教授 (M. Metzz) 1995年、春学期、時間；火曜4時～6時30分、オフィスパワー 火曜1時30分～3時30分、コース概要、課題図書、評価の方法 (省略)

〔セミナーのトピック〕

職業としての教職、仕事場としての学校、教員組合、教師と政治、教師の仕事への社会階層の影響、教師-生徒関係、教師の変化と改革、教師理解のための伝記的アプローチ

メッツ教授は、『教室と廊下』(1978) 『マグネットスクール研究』(1986) など、学校のエスノグラフィ調査で有名な社会学者である。このクラスは、番号が900番台と高く、大学院生を対象にした専門的なゼミで、人気があり、20名強の院生が受講していた。3分の1近くが現職の教員で、ディスカッションでは、教育現場の話もよく出ていた。参加者の年齢は若い院生が半分、残りはさまざまな年齢層で50歳代までいた。セミナーのすすめ方は、体系だっており、前半10回のセミナーは、毎回1冊ないし2冊のテキストを2人が、要約とディスカッションの司会を担当してすすめられた。担当者は発表の前に教授と打ち合わせることが義務づけられ、充分打ち合わせが済んでいるのか、ゼミ当日はメッツ教授はあまり口を挟まず、学生のリードにまかされていた。この司会とディスカッションも成績評価の20%に含まれるとシラバスに明記されている。メッツ教授はゼミの最後には、いつもの確なまとめを10分程度する。日本の大学院のゼミの発表やすすめ方と少し違うと感じたのは、テキストの要約が口頭で、時間にして10分程度、簡単にしかなされない

ことである。そして、そこからすぐディスカッションが始まる。日本では、まずその日のテキストの内容の要約、確認がゼミの大半を占め、討論はそれに少し加わるのが普通であろう。このセミナーでは、要約は簡単で、議論に多くの時間を割かれていた (他のゼミでも同様の傾向がみられたので、アメリカの大学の一般的傾向のように思われる)。そのため、受講者は、あらかじめテキストをきちんと読んでいかなければならない。実際、院生たちのテキストにはマーカーの線が入り、その日の課題の100頁近くの文献をほとんどの受講者が読んできているという雰囲気であった。後半の5回のセミナーは、各自が選んだ文献を、あらかじめコピーして配り、それに基づいてのディスカッションであった。このように、テキストの要約、確認に短時間しかかけないことが、各自のテキスト理解にズレが生じないのであるかという懸念は感じた。また、議論が充分共通の基盤に立ってのものであるかどうかは、残念ながら、私の語学力では判定出来なかった。しかし、取り上げられているテキストが、教師の社会学研究としては、オーソドクスなものが多かったせいもあり、古典的に重要な文献 (D. C. Loier, 1975) を知ったのも収穫であったが、新しい方法論的論議が充分深まっているようには思えなかった。いくつか印象に残っていることは、マイクロ政治的 (Micropolitical) 視点で、学校や教師の世界を分析することに有効性があること (J. Blase, 1991)、学校の文化は、教員の出入りによって判定できる (その学校の文化に合った人が残り、そうでない人は出ていく) といった視点などである。

C and I (662) 初等教育カリキュラム (Elementary Curriculum) 金曜日 4時30分～7時、フライディセミナー 金曜日12時～2時 担当；アップル教授 (M. Apple)

アップル教授の名は、世界中に知れ渡っている。それほど有名教授である。日本でも、4冊の翻訳があり (1986, 1992, 1993, 1994)、その著書は難解だか、よく引用されている。あまり有名すぎて、近寄りがたいと最初感じた。そこで、大学院のゼミは遠慮し、大人数の学部講義を聞かせてもらうことにし

た。時間割を見て、662初等教育カリキュラム(Elementary School Curriculum) (金曜、4時30分～7時)の教室に出かけた(1994年9月、秋学期)。教室には、30人ほどの学生であふれていた。女性が7割、男性が3割という感じであった。人種的には、多様であった。そこに、にこにこ話かけてくる日本人男性がひとりいて、驚かされた。それは関西大学の山本雄二氏であった。山本氏の名前は、教育社会学研究の論文でよく見かけていたが、会って話すのは初めてであった。アップル教授のもとに、4ヵ月前から客員研究員で来ているとのことであった。山本氏とは、氏が3月に帰国するまでの7ヵ月、さまざまなお世話になった。後に山本氏よりアップル教授に紹介してもらい、春学期(1月)から教授の主催する有名なフライディセミナーにも出る許可を得る。定刻にあらわれたアップル教授はジーンズにシャツというカジュアルないでたちで、有名教授というおごりはどこにも見られなかった(U. W. では会ったすべての教授が気さくであったが)。このクラスは、みなを持ち寄ったジュースやパンやお菓子、くだものを頬張りながらの聴講、ディスカッションという気楽な雰囲気であった。本題に入る前に、さまざまな催しの案内やいま教育現場で起こっていることの情報交換が行なわれていた。(受講者のひとりより、最近マディソンの教育委員会が生徒たちに配った暴力撲滅キャンペーンのパンフレットにアフリカンアメリカンの生徒がナイフを持っているイラストが載っていたが、差別ではないのか、教育委員会に抗議するという発言もあった)。その中でも、弱者、マイノリティ、被権力者の味方になつ、という姿勢は一貫していることが感じられた。受講者の半分以上が現職の教員で、講義内容も後での各自の発表も、教育現場に即したものであった。(ここでは、クラスの内容の紹介を省略する。ただ、8ミリの映写機のフィルムに自由に絵や文字を生徒に書かせて、それに音楽を付けて映すという実践が、何度も紹介されたが、いまだもってそれが何だったのかわからずじまいである)

上記は、1994年9月から12月にかけてのクラスのことであった。新しい学期(1月)に入り、フライディセミナーに参加した。この伝統あるセミナーに関しては、教授自身が、著作の中で詳しく紹介している(Apple, 1993,

chap 8)。これは、アップルゼミの院生や客員研究員のインフォーマルな集まりで、各自の研究の発表とそれをめぐってのディスカッションよりなる。世界各国からアップル教授のもとに立ち寄った著名な研究者が、論文を紹介する場合もある。お昼の12時から始まるため、アップル教授はじめ何人かはお昼を食べながら聞いている。参加は、いつも15名ほどで、メンバーは毎回少し入れ替わる。アメリカ人の院生の他に、韓国3人、日本4人、スペイン、ブラジル、ハワイ、アフリカ各1という多彩な人種構成であった。アップル教授の気さくな人柄もあろうが、お互いに親しい知り合いなのか、和気藹々とした雰囲気の中で、発表、議論がすすめられていた。ここでも、発表の仕方が日本と少し違っていた。つまり発表の論文をあらかじめ2日前までに、コピーして配っておき(電子メールで配る場合もあった)、当日、報告者がしゃべるのは論文内容の補足程度だけで、皆の意見を求めていた。したがって、実質討議の時間が長い。まだ未完成な論文にも、暖かいアドバイスが先輩の院生から出されていた。アップル教授は最後に的確なコメントをする。

学期の最後のセミナーはピザを外からとって、ピザをほうばりながらのディスカッションであった。また、アップル教授の自宅でも、ポトラックのパーティーが開かれ、アップル教授自ら甲斐甲斐しく準備におわれていた。フライディセミナーの山本氏の送別会が院生の井口博充氏の自宅で3月に開かれ、アップル教授もワインをもってかけつけるという気さくさであった。

アップル教授の、見方は一貫している。ある新しい教育政策が出されたとき、それがいったい誰の利益になるものなのかと問う姿勢をもっている。そして、いつも、弱者、マイノリティ、被権力者の側になつて、発言、行動する。もちろん、今の社会や教育の複雑な仕組みにも鋭い見方をしている。次のような一節にも、その片鱗は窺える。

『教育上・政治上のさまざまな立場のグループから多くの人々が、より高い水準、国家レベルのより厳格なカリキュラム、全国統一試験制度を求める声に関わっているとしよう。しかし、私たちは常に一つの問いを質さねばならない。それは、これらの「改革」努力において、どの集団が主導権を握っているのか、という問いである。……次は、このすべての結果として、誰が利

益を得て、誰が利益を失うのか、という問いである。……右派集団はまさしく教育において政治的な企てを仕掛けており、人口全体の上位20%の人々が利益の80%を獲得するというパターンが、ここでも再生産されるであろうと主張したい』（アップル、1994年）

C I (716) カリキュラムと教育方法の変化と改革 月曜12時30分～3時15分、担当 ポプケヴィッツ (Popkewitz) 教授

ポプケヴィッツ教授の業績は、まだ、日本で紹介されることは少ないが、アップル教授と並ぶ世界的に有名な教育学者である。歴史的、社会学的視点から、教師教育、カリキュラム、教育改革について、著作が多数ある (Popkewitz, 1981ほか)。その著作、またセミナーでの発言から、フーコーやブルデューやヴィゴツキーの影響も多分に感じられた。つまり、ポストモダンの歴史教育社会学者である。1994年の秋学期は、比較教育学者のカザミアス (Kazamias) 教授と共同で大学院のセミナーを開き20名近くの院生が参加していた。セミナーで取り上げられていた内容は、歴史的、社会学的、比較的、ポストモダン的であり、かなり難解で、院生たちがその内容をどの程度理解していたのか、疑問に思うこともあった。セミナーのすすめ方は、多少おおざっぱで、発表を割り当てられた院生が、その日のテキストになっている論文についてのコメントとして、それをめぐってのディスカッションをするのが普通であった。発表者のコメントは短く、討論も拡散しがちで、見兼ねて、ポプケヴィッツ教授が、黒板を使って要点や論点を説明しはじめるということがよくあった。眺めのいい湖畔に新築のきれいな邸宅があり、よく外国からの学者をまじえて学科の教授達が集まっていたり、院生のポトラックパーティが開かれたりしていた。我々の家族を呼んでいただいたときは、自ら手づくりのハンバークを作ってくださり、娘たちの学校への適応の様子まで心配してくださった。

その他に聴講したクラスは次の二つである。

・教育政策学 200, M. オルネック (Olneck) 教授、「人種、民族とアメリカの教育の平等」

入門のクラスで、60人近い学生が、朝早くから熱心に聞いていた。オルネック教授は授業開始の10分前にはクラスに来て、その日の講義の概要を黒板いっぱい書き、チャイムと同時に話し始める。テキストは、論文集の分厚いバックで、教授の熱意が感じられた。

政治学 640, T. J. ペンベル (Pempel) 教授、現代日本の政治、1995年春
火曜、木曜、11時～12時15分

ペンベル教授は、日本通の高名な政治学者である。その著書については市川昭午氏の詳しい紹介もある (市川, 1988)。日本の歴史から現代の政党政治の混迷まで、明快な語り口で内容のある講義であった。受講者は30名ほどで、大学院生が3分の1程度。日本語専攻の学生より、政治学、経済学、ジャーナリズム専攻の学生が多かった。日本人の学生も4名いた。後半の3回は、5～6人の小グループが共同作業で文献やデータを集め、日本の軍備、労働、福祉についてのディベート形式で行われた。

授業評価

各クラスの最後には、必ず、学生による授業評価が行われていた。教師が席を外し、その場で記入し学生の代表が集め、学科のオフィスの届けるのが通例のようであった。授業評価の時は、教師がそそくさと席をはずす様子が印象的だったが、大教授になると同席のまま、これは形式的なものだという雰囲気で行われる場合もあった。「こういうアンケートは、囚人に刑務所の食事に満足しているかを聞くようなもので、どれだけ信頼度があるのか、いつも疑問に思う。集計結果も、大半の教師は大同小異、あまり参考にならぬ」(佐藤, 1989) と思っている雰囲気であった。学生の評価内容をかいま見た限りでは、普段熱心に発言している学生の教師に対する評価は高く、いつも眠たそうにし、ほとんど発言もしない学生の教師評価は低いという傾向がみられた。このように、どこでも、学生の評価はそのまま使うことができない。学生自身の成績の自己評価やクラスへの出席率も考慮にいれての考察が必要であろう (社会学部の評価表は、学生のそのような属性も記入する欄もあった)。授業評価のシートは、学科ごとによってその形式は違っていた。その一例を示す。

ウィスコンシン大学マディソン校

教育政策学科

授業評価

記入者の名前を書く必要はありません。この評価の結果は、最終成績が出るまでに、担当者に知らせることはありません。これは、教育政策学科の教員の昇進、給与、今後のカリキュラム計画に役立てるものです。

クラス番号

担当者名

学期（秋、春／年）

注意 あてはまる番号を□に書いて下さい。コメントがあれば余白に書いて下さい。

1. 担当者のコミュニケーション能力や表現の明確性はすぐれていましたか。
1 とてもそう 2 ややそう 3 ふつう 4 ややそうでない
5 そうでない
2. 担当者は、講義内容に精通していましたか。
1 とてもそう 2 ややそう 3 ふつう 4 ややそうでない
5 そうでない
3. 学生に興味をもたそうとしましたか。
1 とてもそう 2 ややそう 3 ふつう 4 ややそうでない
5 そうでない
4. 正規の時間以外でも、いろいろ相談や指導に乗ってくれましたか。
1 とてもそう 2 ややそう 3 ふつう 4 ややそうでない
5 そうでない
5. 公平な、成績評価をしていましたか。
1 とてもそう 2 ややそう 3 ふつう 4 ややそうでない
5 そうでない
6. 全体として、このクラスの担当者をどう評価しますか。

1 とてもよい 2 よい 3 ふつう 4 ややわるい

5 わるい 0 無評価

あなたが、このクラスで、満足あるいは不満に思ったことを書いて下さい。この結果は教授に知らせ、今後の授業改善に役立てます。指定図書、講義内容などについても自由に書いて下さい。

社会学部

授業評価

教授名

コース番号

この情報は、各コースが完全に終わり、成績評価がなされる以前に教授に知らされることはありません。この結果は、学部の人事、昇進、予算およびこれからの授業計画の参考にします。

I 学生のデータ

1. あなたの学年は

1=1年, 2=2年, 3=3年, 4=4年, 5=大学院生, 6=その他

2. あなたの成績の平均は

1=4.0~3.6, 2=3.5~3.1, 3=3.0~2.6, 4=2.5~2.1

5=2.0~0.0

3. あなたは、学部あるいは大学院で社会学を専攻していますか。
あるいは専攻の予定ですか。

1=いいえ, 2=はい(学部), 3=はい(大学院), 4=未定

4. このコースは、あなたの卒業単位とどのような関係がありますか。

1=このコースは私の専攻の選択科目である。

2=このコースは私の選択外の選択科目である。

3=このコースは私の専攻の必修科目だが、そうでなくてもとる

つもりだった。

4=このコースは私の専攻の必修科目なので、仕方なくとった。

5=その他(聴講生など)

5. この授業へのあなたの出席率は

1=ほとんど(90%), 2=かなり(75%), 3=半分(50%),

4=かなり少ない(25%), 5=少ない(10%)

II 教授評価

6. 担当者は、講義の準備をよくし、明快な説明をしましたか。

1=ほとんどそう(90%), 2=かなりそう(75%), 3=半分(50%)

4=かなり少ない(25%), 5=全然そうでない(10%)

7. 教授は、学生に対し、オープンで、相談にのってくれましたか。

1=ほとんどそう(95%), 2=かなりそう(75%), 3=半分(50%)

4=かなり少ない(25%), 5=全然そうでない

8. 課題図書(アサイン リーディング)は、どの程度役にたちましたか。

1=とても役立った, 2=かなり役立った, 3=ふつう

4=あまり役立たなかった, 5=全然役立たなかった

9. 試験や成績は、このコースで学んだ知識をきちんと反映していますか。

1=ほとんどそう, 2=かなりそう, 3=半分くらい

4=かなりそうでない, 5=全然そうでない

10. このコースは、1週間に、どのくらいの時間の予習が必要でしたか。3~4単位のコースは、1週間に6~8時間が、標準と考えられています。

1=15時間以上 2=9~14時間 3=6~8時間

4=2~5時間 5=1時間以内

11. この分野に関心をもっている友達に、このコースをとるよう勧めますか。

1=必ずすすめる 2=多分すすめる 3=どちらともいえない

4=多分すすめない 5=絶対すすめない

12. あなたが知っているU.W. マディソンのすべての教員の中で、この教授による授業の質をどのように評価しますか。

1=とてもすぐれている 2=かなりすぐれている 3=ふつう

4=劣っている 5=とても劣っている

III コメント(自由に記入)

5 アメリカの小学校、中学校生活

私達の子どもは、渡米当時、ひとりには13歳、もうひとりには11歳であった。つまり、日本の学校で中学1年と小学5年生の1学期を過ごして、夏にアメリカに渡った。したがって、ふたりとも英語、英会話の習得はゼロに等しかった。上の子は学校と塾で4ヶ月、下の子は公文で少し英語を勉強した。イギリス人の家庭教師に短期間習ったが、成果があがったとは思えない。そのふたりが、現地校でどの程度やっていけるのかは、大きな不安であり、一つの賭けであった。マディソンには、もちろん、日本人学校も補習授業校もない。学校への入学手続きは、住まいと同様加藤教授の奥様がして下さったため、妻が学校へ始業日の前の日に挨拶にいき、後は始業日当日にいけばよいだけであった。日本の学校のように、指定の制服やカバンがないため、準備もこれとっていらぬ。上の子は中学校(Hamilton Middle School)の7年生に、下の子は小学校(Van Hise Elementary School)の5年生になることになっていた。ふたつの学校は隣り合わせで、廊下で繋がり、ランチルームやストリングスの部屋を共有していた。

8月30日の始業日当日は、私と妻も付き添って学校まで歩いていった。アメリカらしい広々とした一戸建の住宅地のきれいな道を10分ほど歩くと、平屋建ての学校があった。学校の校舎の前まで来て、ふたりの娘は臆したのか、しばらく足が前に進まなかった。我々は、ふたりを後から押す様にして学校に入っていた。

子どもの中学校体験

上の娘の担任は、ESLの英語と理科担当の物静かで上品な中年のライリー(Riley)先生で(ESL担当はもうひとり社会科担当の明るいバクスター(Baxter)先生がいた)、時間割や、ロッカーの使い方をやさしい調子で教えてくれた。英語が全然しゃべれない娘に、もしどうしても困ったことがあれば、この学校に唯一もうひとりいる日本人のエリ(加藤教授の娘さん、6学年の普通のクラスに在籍)の所へ行き助けてもらうようにという指示を与えてくれた。ESL専用の教室の壁には、在籍している生徒の写真と国旗の入ったパネルが貼ってあった。娘の所属する7年生のESLのクラスには、以前は日本人の生徒も何人かいたが、今年は日本人はうちの娘だけということであった。その国籍構成は、韓国3、インドネシア3、ブラジル2、ベトナム1、ロシア1、日本1ということであった。娘はこのESLのクラスで、毎日、英語、理科、社会の授業を受け、数学は普通のクラス(数学のテストの結果、上から2番目クラスに入った)、そして他の7学年のクラスと合同で、音楽と体育(隔日)、さらに1時間空き時間があったため、英語のリーディングのクラスを取るように言われた(これはお客さまとして座っているだけであったが、内容が高度で何が何だかわからず、一番苦痛の時間であった様である)。

このように、時間割りは、毎日同じで(体育と音楽は隔日)、朝、7時50分に始まり、下校は2時50分である。クラブ活動はなく(参加している生徒も若干あった)、3時には、徒歩、自転車、親の車、あるいはスクールバス(学校の周辺はアフリカンアメリカンの子は少なく、バスで帰るアフリカンアメリカンの子はかなりいた)で一斉に帰る。

お昼は、お弁当を持参するか、学校でランチをカードか現金で買うことが出来(2ドル程度)、ランチルームで好きな友達と食べることが出来る。娘は、昼食のときは、妻の友人の娘さんと数学で一緒のアメリカ人の女の子が気を遣ってくれて、友達と一緒に席に同席させてくれた。交わす言葉は、会ったときの“Hi”だけだったようだが、いつもひとりでお昼を食べるみじめさは回避できたようだ。

クラスで、みんながサッーとどこかへ行ってしまい、ひとりだけとり残されたことも、幾度かあった。このような状態は、1年間続いた。このように中学生の娘は、本人の内向的性格もあり、また主には英語がしゃべれないということから、クラスメイトとも話せず、先生とのわずかなやりとりを除いて、学校では無言の状態ですることになる。したがって、毎日、何となく沈んだ顔で家に帰ってきた。学校の様子を聞いても「別に」という答えが返ってくるが多かった。それでも、風邪で何日か休んだほかは、学校に通い続けた。

子どもの異文化接触の年齢について、「中学生以上になると、文化や言葉の壁を乗り越えて同輩集団の中に入って行くことは難しい」と指摘されている(蓑浦、1883年)。中学生という時期は、最初に異文化に接するのは少し遅すぎたようだ。

さらに、日本の中学校の勉強が1年間抜けるということが、どのようなことを意味しているかを思い知ったのは、うかつにも日本に帰国してからである。日本で公立中学校に通っていた娘にとって、アメリカに1年滞在するということは、高校受験に必要な国語、社会、理科、数学(アメリカの方が進度が遅く、易しい)のみならず、受験英語でも大幅な遅れをとることになる。

海外子女の統計を見ると、日本人の海外子女で、現地校にのみ通っているのは、わずか25.6%で(北米では22.6%)、その他の大部分は、日本人学校(36.3%)ないし補習授業校(39.1%)に通っている(『教育データランド'95-96』1996年)。それだけ、日本の学校教育はしっかりしており、受験競争は厳しいのである。日本の親はそれを熟知している。

しかし、中学生の娘の異文化体験が無意味だったとは思えない。言葉がわからない苦しい状況の中で、助けてくれるものが誰もなく、それを乗り越えた体験は貴重なものである。アメリカの学校通いも終わりに近づいた頃、ESLのクラスで、自分で作ったパネルを使って、日本についての説明を皆の前でして、成功したのも自信につながっている。また、ピアノを継続して習い、バイオリンも学校の音楽の時間と個人教授で習い、発表会に出演した

のも、今後によい影響を与えるであろう。(アメリカでは、ピアノよりバイオリンの方がポピュラーな楽器として普及しているようで、バイオリンは小学5年生より音楽の時間に取り入れられ、弾く子も多い。親を招いての発表会は頻繁に開かれ、上手下手という技術のことより、楽しむことに主眼が置かれている。)

下の子の小学校体験

11歳、5年生の下の娘の、学校適応は、上の娘と少し違っていた。学校初日から、遊びたいと先生に申し出てくれる子がいて(親がよく外国の家族の面倒を見ている家庭の子であった)、最初の日からその子と一緒に校庭を駆け回っていた。まもなく、仲のよい5人組ができ、いつも行動を共にしていた(友人グループは日本ほど閉鎖的ではない)。小学5年生という時期は、自我も確立しておらず、異文化に入っていくのに抵抗のない上限内なのであろう。

ESLも毎日1時間あったが、所属したクラスは、ESLではなく普通の5年生クラスであった。そのクラスは、4年生と5年生の合併の変則クラスであった。1クラスは23名(イギリス人1名、インド系2名、韓国系1名、中国系1名、ほかは白人、全員英語が第一言語/それに自閉症1名、ダウン症児1名も同じクラス)。

担任のクレンドル(Crandall)先生は、一見アメリカのてきぱきしたこわおもての中年女教師という第一印象だが、実は親切な情のあつい先生で、ぶっきらぼうながらさりげない配慮をよくしてくれた。たとえば、始業日に生徒がひとりずつ自己紹介をして娘の番になりとまどっていると、先生は「私も日本語が話せないの。英語でいくつか質問しますね。お名前は?……」と、英語を話せないことと日本語を話せないことを対等に扱い、最初から英語が話せないことは少しも恥ではないという言い方で、緊張している娘の気持ちを楽にさせてくれた。クラスにはその担任の先生以外に、補助教員が2名いて、授業や採点の手伝い、そして自閉症児、ダウン症児の面倒をみていた。

(1名は教育人類学専攻のU.W.の大学院生)

机の配置は、4名~5名ずつのグループで、日本の班学習のような座り方

をしていた。教授方法は、伝統的な一斉授業の形が多く、また教科によって2つか3つに分割する場合も見られた。教科書を使用していたのは算数のみで、プリントを使った授業が多かった。算数は、進度別に個人個人違ったプリントで問題を解き、自分で採点するケースが多かった。日本で算数の苦手な娘も、ここでは算数の優秀児だった。社会科は、自分で考える内容が多い(たとえば、自分がインディアンだったら、こういう場合どうするかを考えながら、インディアンの生活について学ぶ授業が2ヵ月続き、娘はすっかりインディアン好きになった。)ESLクラスは、毎日1時間、3、4、5年生合同であり、生徒は6~7名で、ESL専門の先生が教えていた。

毎時間、生徒の教室の出入りが多いのが目立った。それは個人個人選択科目が違うことによる。コーラス、ストリングス、コンピューター、ESLクラスなど好きな科目を取り、また交替で、体の不自由な子の面倒をみる、交替で近くのスーパーへお菓子の材料を買いに行く時も、クラスを抜けることになる。抜けた時間の補填にあまり気を配っている風には見えなかった(後述するように、クラスに対する考え方が、日米で違う)。

お昼は、hot(学校で購入)でも、cold(家から持参)でもよい。お菓子やケーキも食べてよい。食堂で、好きな友達と食べ、終わったらすぐ遊んでよい。休み時間は、昼休みを含めて3回、寒いときも、外で遊ぶことが奨励されていた。放課後のクラブ活動なし(仏独の選択科目あり)。

学校の時間は、7時50分~2時30分。帰宅はバス、徒歩、車(親による送り迎えも多い)。

インターナショナルデイ(それぞれ、民族衣装を着て学校にくる日、アフリカンアメリカンの校長先生もアフリカの民族衣装で来校。親によるお国紹介もあった。日本人の親達は、折紙と習字を生徒たちに教え好評だった。日本人の子どもたちは着物姿が多かった)、クレイジーヘアデイ(Crazy hair day、奇妙な髪型で登校する日)、パジャマデイ(パジャマで登校する日)、バレンタインデイ(プレゼントを持ってきてよい)、父親の職場を尋ねる日など、特別な日が多く、学校へ行くのが楽しみなように工夫されていた。

この小学校には、うちの子も含め7~8人の日本人児童が在学していたが、

1～3年の小さい子が多く、学校への適応は全然問題ないようであった。5年生の娘は、最初は先生の言うこともさっぱりわからず、ボーとしていることが多く、最初妻の助けが必要だったが、徐々に先生や友達の言うことがわかるようになっていった。娘は仲のよい友達4人（アメリカ人2、イギリス人、インド系の子）と学校内のみならず、学校が終わってからや休みの日にも電話で連絡を取り合って、一緒に遊び、アメリカでの学校生活を楽しんでいた。週2回、英語の家庭教師を頼んだのも（前述したように、時給10～12ドルと安い）、英語の上達を早めたようだ。ただ、学校で出される宿題をやっていくのに、親がかりでも時間がかかり、いつも寝るのは12時近くなり、朝はだるそうで、午前中は学校でもさえない顔をしていた（アメリカ人にとっては、そんなに多い宿題ではなかったと思われる）。

アメリカの学校登校日は年間約180日（日本240日）と少ない。土曜と日曜が必ず休みの週休2日制は、ふだんの日のスケジュールがきついだけに、助かった。2日間休みだと、1日は休養に、1日は外出に使える。週末はマディソンにもさまざまなイベントがあるし（音楽会、ファーマーズマーケット、インディアンのお祭り、フットボール、バスケットボールの試合ほか）、車で30～40分もいったところには、さまざまな自然、観光地がある。夏休みは6月中旬より8月までの2ヵ月半。この間、サマースクールやデイキャンプ、泊込みのキャンプなどさまざまある。

最後に、アメリカの小中学校に通う娘達の様子から、明らかになった日米の学校や教師や教室や生徒の類似点、相違点をまとめておこう。

第1に、言葉や文化が違って、同じ人間の営みとして、学校やその中で人間関係、心づかいに日米共通のものがあると感じた。渡米前は、大ざっぱに日米の類似3割、相違7割と思っていたが、観察そしてアメリカで生活してみて日米の類似7割、相違3割と感じた。もっとも、これは現代の日本人（人）がそれだけ、欧米化しているということかも知れない。英語の話せなかった娘達が無事1年アメリカの現地校でやってこられたのは、日米の人間としての共通性が多分にあったと思う。

第2に、クラス（学級）に関する考え方が、日米で少し違う。日本では、

生徒は学級に全所属で、先生も自分のクラスの子を自分の家族の一員のような気持ちで全面的に面倒を見る。アメリカでは、生徒はクラスに半所属で、同じクラスで学ぶのが便利だからそこで学んでいるので、別に自分にあった科目があればそちらを優先する。アメリカの教室で生徒の出入りが多いのは、私の観察だけでなく、日米の教室風景のエスノグラフィ調査をした恒吉も指摘している（恒吉、1992）。日本では学級単位で時間割が考えられているのに対して、アメリカでは個人単位で時間割りが考えられている。アメリカで、クラスを抜けて自分にあった科目をとり、抜けた時間の補充をしなくてよいのは、個人単位から考えれば当然である。

第3に、教師の生徒に対する統制の仕方が日米で違う。日本の教師は、酒井（1991）が明らかにしたように、子どもと休み時間に一緒に遊んだり生活指導によって生徒の心をつかむことが期待される。アメリカ教師は生活指導はカウンセラーにまかせ、自分は教科指導でいかに生徒の心をつかみ、やる気をおこさせるのみに腐心する。学級の中にいろいろな係りをつくり教師の指導なしでも生徒が自主的に行動し学級が統制がとれるようになっているのは日本の学級であり、教師の権威でもって生徒を統制していくのがアメリカ学級である。

アメリカの小学校に3ヵ月滞在して、小学校のクラス観察した上智大学教育学科生荒井（1995年）は次のようにコメントしている。『日本とアメリカでは、教師の児童に対する接し方が違うようである。私はアメリカの学校に滞在していた間に、普段は穏やかな先生が、児童の前では「私の言うことを聞かなくては許しません」という厳しい態度で怒るのを幾度も見た』（「アメリカの教師は）児童を静かにさせる為にかなり苦勞をしてるようである。これは一つにはアメリカの公立学校では学科指導に重点をあて、しつけは主として親の仕事だとする傾向があるといわれるが、家庭崩壊が進み、家庭で満足なしつけを受けていない児童の増加に伴いその負担が教師にかかってきている』

第4に、日本のような中学入試、高校入試がない分、生徒たちはのびのび、のんびり過ごしている。小学生では、スペリングを除き、暗記する必要がな

く、カリキュラムも生徒の思考を育てるようになっていく。しかし、算数、数学の進度、学力は日本よりかなり遅れている (Stevenson and Stingler, 1992)

6 アメリカの夏休み

6月の上旬には、はや学期の最終日がくる。下の娘は最終学年(5年)なので、卒業式があった。卒業式は体育館で、5年生とその親が出席して、校長のスピーチと校長と担任の先生からのひとりひとりに対する卒業証書授与があり、その後、同じ場所でケーキとお茶の出るパーティーがあった。パーティーでは親同士また親と子がかかなり顔見知り、みんなが別れを惜んでいた。

それから長い2ヵ月半の夏休みがくる。アメリカの子に、夏休みの計画を尋ねると、友達と遊ぶ、カヌーに行く、祖父母の家に行く、家族で旅行すると、いろいろだが、基本的には、家でのんびりと夏を楽しむという風であった。

それに対して、わが家は夏休みの計画は気合が入り、さまざまな期待があった。アメリカ滞在の最後の2ヵ月半ということもあって、目一杯スケジュールを詰め込んだ。後から考えると、それは日本人のワークホリックのなせるわざだったような気がする。またサマースクール、集団キャンプといった、学校的なものに子どもたちをやり鍛えたいと、学校信仰のようなものに毒されていたようにも思う。周囲のアメリカ人たちは、夏休みは基本的に家族とゆったりと時間を過ごす時と考えていたように思う。

わが家の過密スケジュールとは、次のようなものである。最初の1週間は、家族でイエローストーン国立公園への旅行、次の3週間は、通っていた学校でのサマースクール(午前中のみ)、1週間休み(この前後妻はひとりでヨーロッパ旅行)、次の2週間は音楽(バイオリン)のサマースクール、3日休み、11日間のYMCAキャンプ、その後、ボストン、シカゴを旅行して帰国。

実際このスケジュール通りに過ごしたのだが、最初の期待が大きかっただけに、失望感も少なからずあった。イエローストーン国立公園は、さすがにアメリカの最初にして最大の国立公園だけあって、その雄大さや自然保護の様

子には感嘆した。アメリカという国のスケールの大きさを再確認した。学校でのサマースクールでは、上の子は野外生物学、下の子は化学と動物学を選択した(1科目20ドルと低料金)。それなりに楽しんでしたが、学校と違いのんびりとしたスケジュールで進行し、日本の塾のような集中的な学習を期待していた我々には不満が残った(上の子は3日でやめてしまった)。バイオリンのサマースクールは、集団指導のため技術的進歩はあまり望めなかったが、8日間音楽漬けで、最後にオーケストラの発表会があり充実感もあった。

11日間のYMCA宿泊キャンプは、途中ホームシックにかかりドロップアウトする可能性も大ながら、もし最後まで残れたら、アメリカ人の子どもたちの中で四六時中生活し(10人ずつ一つの小屋で寝泊りしていた。きょうだいで部屋は別にしてもらった)、さぞ成長するであろうという期待があった。途中帰りしたいという電話もなく、11日目に迎えにいくと、意外なことに子どもたちはあまり初日と変わった様子もなく淡々としていた。後で言葉少なくて語る感想をまとめてみると、キャンプでは、湖でのボート、カヌー、水泳、クラフトと毎日ほぼ同じスケジュールで少し退屈だった、湖の水があまりきれいではなかった、シャワーの水が十分出なかった、夜、虫がたくさん出て眠れなかったということの不満がいくつかあり、満足度を低めたことがわかった。もちろんこれを、豊かな消費社会の中に育ち苛酷な自然の中に生きぬいていけない軟弱な日本人の子どもの愚痴として聞くこともできる。事実、アメリカの子どもたちは十分楽しんだ様子をしていて、ただ、日本で、これまで3泊4日のキャンプに参加して、充分楽しみ大きく成長して帰ってきた子ども達を見てきただけに、少し期待はずれであった。それでも、ほとんど英語をしゃべれない上の子は片言で話し仲よくなった子ができて自信を少しつけた。下の子は逆に、話す友達はできても、学校の時のような親友が出来ず自分の友人形成能力に自信を失ったという逆転もあった。アメリカのサマースクールについて、よく理想化して語られるのを聞くことが多いが、実態をもう少し詳しく調査する必要があると感じた。

7 アメリカからみた日本

我々の滞在期間は、円高が進み（一時1ドル=80円近くまでいった）、日米の経済摩擦が悪化しているときだけに、テレビや新聞でもそのことが報道され、アメリカ人の対日感情は悪いのではないかと心配した。しかし、幸か不幸か、マディソンで一番読まれているウィスコンシン・ジャーナル(WISCONSIN JOURNAL)ほかの地元紙には、日米関係や日本のことはほとんど出てこない（阪神大震災とオウムのサリン事件の時は別で、CNNのトップニュース、地方紙でも大きな扱いであった）。一日中、流れるニュースのチャンネルも、O. J. シンプソンの裁判のことに大半の時間を割き、日本のテレビや新聞で見ると、国内外の政治、外交のニュースはわずかであった。大学生は、地元紙ではなく、ニューヨーク・タイムズ(NEWYORK TIMES)を読み、世界や政治、文化の情報を得ていたようだが、一般の人は地方紙で地元のことに關心を向けていた。したがって、日米貿易摩擦があっても情報が少なく、対日感情は、無色に近いと感じた。一方、日本製の車、電気製品、カメラ、ビデオカメラが出回っており、その性能の評判が高く、その点で日本は高く評価されていた。（中古の日本車は値段が高いまま売れる。画面付きの日本製のビデオカメラが称賛されていた）

しかし、滞在中何度か、日本人がどう見られているかということ、思い知らされる場面があった。ひとつは、日本の政治(Politics of Japan)のクラスで、出席していた学生たちがあげた日本および日本人に対するイメージはマイナスのものばかりで、座っているだけで恥ずかしい思いをした。担当のT. J. ペンペル(Pempel)教授からは、アメリカ人の現在の日本に対するイメージは、かつてのロシアに対するのと同程度に、悪いとの指摘があった。

もう一つは、アップル教授のフライデイセミナーで、日本人の院生の井口氏が、アメリカの青少年の原爆観について、調査データにもとづき発表した時のことである。韓国の3人の院生から強い批判的意見が出された。日本が第二次世界大戦の時アジア諸国に対してなした残虐行為に言及することなく、原爆を問題にするのはおかしいというもので、井口氏の発表の文脈と大きく外れたものであったが、文脈を外してまで強い憤懣をぶつける韓国の院生発

言に、韓国の人たちのホンネの日本(人)観がかいま見えた。個人的には、韓国の人たち(中国、台湾の人と同様)は、同じアジア人として、日本人に同類意識があり、親しみを示してくれるが、戦前に日本がアジア諸国へなした行為は、大変な怒りを感じていることは明らかである。韓国において、その点に関する徹底した教育がなされていることも感じられた。また日本びいき韓国の院生との何気ない会話のなかに、「戦争勝利50年のお祝いの会がワシントンで開かれている」という言葉が出てきて、第2次大戦に対する日韓の意識の違いをはっきり知らされた。

さらに、フロリダのディズニーランド内のホテルのレストランで、次のような家族の会話が耳に入った。5~6歳の男の子が祖父や両親に、「日本は真珠湾奇襲という卑怯なことをしたのだから、原爆を落として当然である」と得々としゃべり、皆ももっともだと頷いていた（隣のテーブルにいた我々を意識しての会話だったのかどうかは定かではない。我々はいたたまれず、席を立った）。

5学年の娘の使っていた社会科の教科書には、日本軍の真珠湾奇襲で死んだ人の数(200名前後だったと思う)は明記されていたが、広島、長崎への原爆投下によって、戦争が終結したという記述があり、原爆で死んだ人の数は書かれていなかった。スミソニアン博物館の原爆展は、アメリカの在郷軍人会や遺族会の反対で中止になった。このようなことから、原爆問題について、我々が考えるとき、被害者意識のみからの発言は有効性をもちず、J. W. ダワー教授のように、アメリカ人の日本(人)観、つまり真珠湾攻撃、日本での欧米人捕虜の死亡率の高さ、日本人の世界経済支配の野望等も考慮に入れての議論が必要と強く感じた(ダワー、1995年)。

U. W. には、日本語専攻の学生も多数いて、その中には、日本に中学高校の英語教師で1~2年、行ったことのある人、かつて日本に留学したことのある学生、これから留学予定の学生もいて、彼らは大変な日本びいきであった。日本の文化、文学に惹かれるもの、地方都市のよさに懐かしむもの、日本人より日本的な物腰の女子学生などがいて、私は彼らに英語を教わったり、日本語を教えたりで、楽しい時間を過ごした。先のヘンヘル教授の「日本の政

治」のクラスに出席していた学生たちは、政治学や他の社会科学専攻の学生が多く、日本びいきというよりは、日本をひとつの研究対象として見ようという姿勢が感じられ、日本研究の広がりを感じた。アメリカ中西部の日本研究の年次大会が12月にU. W. であり、私も知人の紹介で参加したが、人類学、政治学、語学、文学と幅広い分野の研究者が集まり、日本の政治から文学まで(その時は、島崎藤村のふる里論の発表もあった)、水準の高い議論が展開されていた。また、原爆切手反対の決議をするという日本寄りの雰囲気にもあふれていた。懇親会もアメリカ的な立食パーティーではなく、日本的な会食会であった。

8 ホーム・スクール (Home School, Home Schooling) について

ホームスクールという言葉をはじめて聞いたのは、韓国の教授が、バンハイズ小学校の校長ガードナー博士に、ホームスクールについてどう思うかと盛んに尋ねるのに同席した時である。その後、妻の知り合いの家を尋ねたとき、そこの6歳の男の子ベン(Ben)が、学校に通わず、ホームスクールで勉強していることを知った。ホームスクールとは文字どおり、家が学校になる、すなわち家で親が子どもに勉強を教えるという意味である。そして家庭が学校の代わりになるというより、それが正当な就学として、ひとつの選択として州政府が認めてということである。その認め方は州により異なり、年々の法律はホームスクールに有利な方向に変わっている。私はベンに普段の生活ぶりを尋ね、ホームスクールのテキストや勉強の成果を見せてもらった。ベンは、自分のペースで勉強することが好きな子で、好奇心が旺盛で、興味をもったことに徹底してして探求する性格で、学校の集団生活より家庭での勉強にむいているというのが母親の説明であった。毎日、時間と分量を大体決めて、ホームスクールのテキストで勉強していた。テキストは学校の教科書に、ドリルは日本の市販のドリルに体裁や内容は似ていた。算数のドリルのすすみ具合を見ると、1年生としてはかなり進んでいるという印象であった。家での勉強は、学校のような無駄な時間がなく、すらすら進むとのことであった。ベンは、学校の集団生活を経験していないため社会性や社交性に

問題があるかという点、全然逆で、母親がよく教会やいろいろな集まりにベンをつれていったり、家に人を呼んだりで(母親は毎週日本人やアジアの女性のための聖書の会を開いていた。一度は、日本人家族を中心に50名近く人が集まって、バーベキューパーティが開かれ、ベンは、子どもたちの遊びの中心にいた)、かえて、いろいろの人とのコミュニケーション能力は長けているという印象をもった。私達が訪ねたとき、異国の年上のうちの娘とも人見知りなく、ボール蹴りやかくれんぼをすぐ始めたし、私にも勉強ぶりについて、いろいろ説明してくれた。親がホームスクールを選ぶのは、宗教的理由も多分にある。いま、アメリカの公立学校では宗教教育を行うことが出来ず(バンハイズ小学校でも、キリスト教関係のお祝い、たとえばクリスマスのお祝いもしない)子どもに宗教心や道徳心を涵養するために、ホームスクールを選択する親は多い。ホームスクールを始めた理由のうち宗教的理由をあげたものが65%を占める(Wade, 1995)。テキストも、宗教団体も含め、さまざまな団体が発行して、販売している。

アメリカにおけるホームスクールに関して、文献から見ると、次のような点が見える。アメリカでは、1852年にマサチューセッツ州で8歳から14歳までの子の就学義務を定めた義務教育法(Compulsory School Attendance Law)が出来、他の州もそれに習った。そして、現在各州は、一定の年齢の子の就学を義務づけているが、子どもを家庭で教えるホームスクールについて、さまざまな条件を付けて認める州が多い。年々ホームスクールに対して、好意的になっているが、州によってその規定は違う。1994年の秋の時点で、ある条件を充たせば「ホームインストラクション」(home instruction)あるいは「ホームスクーリング」(home schooling)を認める州が34州ある。そのうち5州(ウィスコンシンを含む)は最も規定が緩く、公立学校と同じ基本的科目を同じ時間量教えたことを証明するものを毎年提出すればよい。2州はそれに隔年の子どもに対するテストが加わる。次の34州は、毎年の標準テストあるいは生徒が充分学んだかの評価をする。残りの16州はホームインストラクションを公式には認めていない。しかし実質的には、一定の条件のもとで、たとえばホームスクーリングを私立学校として認めるような形で認め

ている。(Wade, 1995)

フロンティアの時代はホームスクーリングは普通であった。教育が強制になってから衰えたが、最近20年で親が子どもの教育に直接かかわりたいと考える傾向が増えてきている。ホームスクーリングの子は、1970年代は1万~2万人、1983年秋には6万~12.5万人、1985年秋に12.2万~24.4万人、1988年秋に15万~30万人と推定される(Galen and Pitman, 1991)

親はなぜ子どもをホームスクーリングで育てたいと思ったのか。メイベリーの調査では「宗教的信念」(65%)、「成績のため」(22%)、「社会的発達のため」(11%)、「その他」(2%)と、宗教的理由が、4分の3近くを占める。親の宗教的信念をきちんと子どもに伝えたいという動機が多い。ホームスクーリングの家庭は、プロテスタントが多い。聖書を教育の基本に据えたいと思っている。学校は競争に充ちている。家庭の方が、競争で敗者になることを心配することなく純粋に勉強に打ち込める。さらに、子どもたちが学校で、セックス、麻薬、盗み、詐欺のことをいつも考えている仲間たちにとり囲まれる。健全な社会発達は家庭の方が有利である。(Wade, 1995)

ホームスクールの典型的な家庭は、白人、両親が揃っている、高学歴、高収入層、プロテスタント、母親が教育を担当、他のホームスクール、教会、学校、図書館、教材組織といった地域社会の資源を利用、宗教的な理由が第一、他に同年代の仲間の仲間からの悪い影響を阻止、家族生活の質の向上、自己概念の向上等があげられる。自分の子だけを教えるケースが多い。勉強時間は1週間に20~30時間、親は自分の受けた伝統的な教育方法で教えることが多いが、自由な場面(informal setting)も求め、地域の子どもや大人と交わる機会を多くつくる、テストの成績は概して学校にいつている子より良い。ガレンらが参与観察で調べた16のホームスクール家族では、子どもの半分が一度も学校にいったことがなく、残りの半分は公私の学校の退学者。13家族は保守的なクリスチャンで3家族は無宗教。ホームスクールの親は、教育を私的なものであると同時に、社会の必要に応じるものしも考えている。しかし、今の学校が、ライマー(1985)の指摘するように「現実の生活の経験に代えて、死んだ知識を教える」ところになり、アップル(1992)らが指

摘するように女性、マイノリティなどの生活経験を排除し、人種や性や階級の不平等を再生産する場になって、真の社会性を失っていることも批判する。

(Galen & Pitman, 1991)

このホームスクールは日本の現在の教育にどのような示唆を与えてくれるのであろうか。不登校問題にひとつの見方を提供するように思える。日本では、学校は神聖な場所であり、皆がいかななくてはならないところという「学校神話」がはびこっているが、ホームスクールがアメリカのように法律的に認められれば、不登校問題を悪化させている「学校神話」はかなり崩れるであろう。文部省は、学校にいかない子どもも、学校に変わるフリースクールのようなところ(都道府県市町村教育委員会が認定)に通えば、登校日数にカウントするという施策をとっているが、それも学校中心の考え方にまだとらわれているといっただけであろう。子どもの教育は、本来親が責任をもつ。親が自由意志でその一部を、学校やフリースクールや塾に委託すると考えれば、子どもが学校にいかないことに何の罪悪感も生じない。近代に成立した学校は、カツ(1989)や森(1993)が示したように人々の生活の必要からではなく、上からの統制のために生じたのであれば、またさらに、一部の社会階層のものになっているのであれば、なおさら子どもの教育を親に取り戻す発想が大事であろう。日本では親の教育水準は上がり、親が子どもの教育に対して自由に選択したり、学校の教師以上に上手に教えることが出来る条件が整いつつある。もちろん、親が不在であったり、親が子どもの人権を無視するようなケースについては、公の力が働き、子どもの立場を守るべきである。また、親の社会階層の違いによって子どもの教育に不利に働くことのないような教育の機会均等策も実施されるべきである。いずれにしろ、子どもをどのように教育するかは親にあるというホームスクールの考え方や実践は、公教育に対してその見直しを迫るものである。もっとも、集団志向の強い日本人にとって、子どもを学校にも、フリースクールにも塾にもやらないという脱集団主義、個人主義の姿勢を貫くのは、容易なことではない。今後の動向を見守りたい。

9 U.W.の教育学の研究動向

最後に、いくつか、大学における教育学研究について感じたことを書いておこう。

まずU.W.には、教育社会学者がいないのに驚いた。日本では、教育社会学の講座や学科目を置く大学が多く、日本教育社会学会に所属する会員は千人を越え、教育社会学専攻と自己認知している研究者が多数いる。ところが、U.W.では、多数開講されている教育学部の科目(クラス)の中で、教育社会学(Sociology of Education)という名称のついているのは、各学期に一つのみであった。それも、社会学部の教授が担当していたり、エスノグラフィ専門の教授が担当したりしていた。しかし、そのことは教育社会学研究がなされていないということを意味しない。逆に教育学部のどの講義を聴いても、社会学的観点が入っていた。先に紹介した、シュメック講師(「学校と社会」)、オルネック教授(「アメリカにおける人種、民族と教育の平等」)、アップル教授(「初等教育カリキュラム」)、ポプケビッツ教授(「カリキュラムと教育方法の変化と変革」)は、教育社会学というタイトルも副題もついていないし、シラバスにも講義の中にも教育社会学という言葉はほとんど出てこないが、その内容は私が日本にいるときの感覚からいうと、きわめて教育社会学的であった。さらに、教育政策学科(EPS)の開講科目の内容は、教育史、教育哲学も1~2科目ふくまれているが、そのほとんどが社会学的ないし社会科学科学的であった。次に挙げるのは、教育政策学科の1994年秋学期の開講の全科目である。

「アメリカにおける人種、民族と教育の平等」「学校と社会」「インディペンデントリーディング」「新しいヨーロッパにおける教育」「人的資源と経済発展」「児童期と青年期の比較歴史研究」「社会問題と教育」「都市教育の問題」「現代の教育哲学」「教育と性役割の社会化」「高等教育と女性」「人類学と教育」「学校と児童の権利」「教育政策の問題」「教育社会学」「教育政策研究」「社会科学と教育政策研究」「教育の古典」「質的調査の方法」「高等教育における継続教育」「教育史セミナー」「植民地における教育の比較歴史研究」「教育と公共政策」「教育問題の国際比較研究」

これを見ると、アメリカで政策(policy)あるいは政治的(political)という言葉は指す範囲が日本より広く、日本の社会ないし社会的(あるいは社会学的)という意味に近いことがわかる。さらに人類学的(Anthropological)アプローチ的からする教育、学校研究(教育人類学)がきわめて盛んで、これはこれまで日本でほとんど発達しなかった分野である。スタンフォード大学のG.D.スピンドラー(Spindler, 1982)およびその弟子たちの活躍が目ざましく、たくさんの文献が発行されている。教育分野、学校では、質的あるいはエスノグラフィ(Ethnography)調査が一般的で、量的調査は影を潜めているという感じであった。日本の学校、幼稚園、青少年などに対するアメリカ人のエスノグラフィ調査も、有名なカミングス(1980)、ローレン(1988)、のもの以外にも多くなされている。エスノグラフィとわざわざ断るまでもなく、調査といえば質的につまりエスノグラフィックに行なうのがかなり一般的になっている。

高等教育に関しては、残念ながら現在のU.W.に専門家がいなかったようで、「高等教育と女性」を除いて開講科目がなかった。カレッジ・インパクト(College Impact)関係の研究や大規模な時系列調査報告書が多数出た。

多文化教育(Multicultural Education)についての論議、研究が盛んになっている。J.A.バンクス(Banks, 1995)が、その代表であろう。アメリカもかつてのメルティングポットからサラダボウルに変わりつつある。日本でも早晚話題になる分野であろう。

U.W.には、有名なH.M.クリバード教授(Kliebard, 1995)もいて、カリキュラム(Curriculum)研究がたいへん盛んである。

また大学院生に現場教員が多く、研究と教育実践との結びつきも強い。世界各国から、研究者、院生が集まっており、国際的な雰囲気にも充ちており、研究の水準も高い。

10 まとめ

初めての海外生活、しかもわずか1年間のアメリカ滞在だったため、既存

のアメリカ論やアメリカ教育論で述べられていること以上の発見があったとは思えない。しかし、いろいろ言われていることを自分の目で確かめることが出来たのは収穫であった。特に、印象に残っていることを、繰り返しながら記しておく。

(1) アメリカの人々の生活は、経済的に決して裕福ではないが、生活の質は日本のそれよりはるかに高い。大学町の人々の心は広く、親切である。

(2) 大学の教育は、シラバス、時間割、図書館、試験、評価、教授、学生の熱心さなどすべてが一体となって、成功している。大学のクラスでは、課題図書の見聞、ディスカッション、レポートが重視され、学生は熱心に学んでいる。

(3) 日米の小中学校は、学級についての考え方（アメリカは個人主義的）や教師の指導方法（アメリカは権威型）に違いも見られるが、共通点も多い。

(4) 日本では子どもを世間に出し育てよう（学校や塾もその一つ）とするのに対して、アメリカでは、子どもは家族で育てるという考え方が基本的にある。夏休みの過ごし方にもそれが現れているし、またホームスクーリングの育つ土壌もある。

(5) 日米関係は普通のアメリカ人にとって大きな関心事ではない。しかし、第2次世界大戦、原爆に対する、日米の（そしてアジアの）人々の認識には大きな隔りがある。

(6) 教育について社会的に考えることは、教育社会学者の特権ではなくなりつつある。教育の社会学的研究の中には人類学や比較的、歴史的視点も含まれ、学際的な研究が進んでいる。

大学の研究者がサバティカルの期間に、外国で過ごすことは多いであろう。そこでどのような生活をし、どのような成果を得ているのかについての研究があるのかどうかは知らない。一部の有名な研究者や文学者の海外研究生活が紹介されたりするが（江藤1972、加藤1978、藤原1991）、それがどの程度一般化出来るのかわからない。確かに若いとき海外で勉強した経験がある、あるいは語学が堪能な国際的研究者にとっては国内にいる時以上に活躍し多大

な成果をあげ得るであろう。しかし、そのようなものばかりではないはずである。一般の大学教師の海外渡航（研修）がどのようなものであるのか、自分を例にして書きたいと思った。しかし、結果的には表面的な記述で終わってしまった。また研究内容についても書くことが出来なかった。次の機会を期したい。長期の海外生活を送ると「どんな親しい友人ともわかち持てない一部分が、自分のなかに出来てしまう」「自分のなかに、親しい友人とさえ容易にわかちもてぬなにかがあると感じるからこそ、私はそれについて書かなければならない。それは、大きくいえば「外の世界」を経験してきた日本人に伝統的に課せられた義務であり、小さくいえば私一個の必要のためである」と、江藤淳は、『アメリカと私』（1972）のなかで書いている。マディソンで一緒だった山本氏も、渡米した時より日本に帰ってきてからの逆カルチャーショックの方が大きかったと述べている。このささやかな報告も多少同じような気持ちから書いた。1年間の日本不在で、私の中で何かが多少変わり、人との距離も微妙に変わった。

このような機会を与えてくださった上智大学と、いろいろご迷惑をおかけした上智大学教育学科の先生方、院生・学生諸君に心よりお礼とお詫びを申しあげたい。

（1996年2月20日）

〔引用文献、参考文献〕

秋間浩、1991年『アメリカ200のキーワード』朝日新聞社、232頁

Almanac of Higher Education, 1994 U. of Chicago Press, p. 290

Apple, M. W. 1993 Official Knowledge Routledge, chap. 8.

アップル、W. マイケル（門倉正美他訳）1986『学級幻想とカリキュラム』日本エディタースクール出版社

アップル、W. マイケル（浅沼茂、松下晴彦訳）『教育と権力』1992、日本エディタースクール出版社

アップル、W. マイケル他、1993『学校文化の挑戦』東信堂

アップル、W. マイケル、1994「公共知識をめぐるポリテクス」『カリキュラム・ポリテクス』東信堂、13頁

荒井美貴子、1995「アメリカの初等教育の特質」上智大学教育社会学ゼミ論文、23-28頁

- Banks J. A. (ed) 1995, Handbook of Research on Multicultural Education, Macmillan,
- Blase, J. ed. 1991 The Politics of Life in Schools, SAGE P.
- ダワー・ジョン・W. 1995年6月11日, 「特別な関係の終焉」朝日新聞
- 江藤淳『アメリカと私』1972, 講談社, 13頁, 35頁, 67-68頁
- 藤原新也, 1990『アメリカ』情報センター, 324-331頁, 423頁
- 藤原正彦, 1991『遙かなるケンブリッジ』新潮社
- Galen J. V. & Pitman, M. A. 1991 HOME SCHOOLING Political, Historical, and Pedagogical Perspectives, Ablex P. C.
- Gorder, C. 1990, Home Schools: An Alternative; Blue Bird P.
- 市川昭午, 1988『教育システムの日本の特質—外国人がみた日本の教育』教育開発研究所
- カッツ M. B. (藤田英典他訳), 1989『階級・官僚制と学校』有信堂
- カミングス, ウィリアム, K. 1980『ニッポンの学校』サイマル出版
- 加藤秀俊, 1978『ホノルルの街かどから』中央公論社, 12-13頁
- 苅谷剛彦, 1992『アメリカの大学・ニッポンの大学』玉川大学出版部, 134頁
- Kliebard, H. M. The Struggle for the American Curriculum, 1893-1958, Routledge, 1995
- 『教育データランド '95-96』1996, 時事通信社, 264頁
- Loier, D. C. 1975. School teacher: A Sociological Study. U. of Chicago Press.
- 蓑浦康子, 1983『子供の異文化体験』思索社, 18頁
- Metz, M. 1978, Classroom and Corridors U. of California Press.
- 森 重雄, 1993『モダンのアンスタン』ハーベスト社
- 中岡哲郎, 1982『イギリスと日本の間で』岩波書店, 5頁
- 中山 茂, 1994『大学とアメリカ社会』朝日新聞社, 174頁
- ライマー・E. (松居弘道訳) 1985『学校は死んでいる』晶文社
- ローレン・P. T. (友田泰正訳) 1988『日本の高校』サイマル出版社
- Pedersen, A. and O' Mara, P. 1990 Schooling at Home, John Muir P.
- Popkewitz, T. S. 1991, A Political Sociology of Educational Reform, Teachers College Press.
- 酒井朗, 1991, 「小学校教師の役割に関する日米比較」日本教育社会学会第43回大会発表要旨, 75-76頁。
- 佐藤和夫, 1989『アメリカの社会と大学』日本評論社, 79頁
- Spindler, G. 1982, Doing the Ethnography of Schooling: Educational Anthropology in Action, Waveland P. I.
- Stevenson, H. W. and Stingler J. W. 1992, The Learning Gap. Sumit Books
- 恒吉僚子, 1992『人間形成の日米比較』中央公論社, 32頁

Wade, T. E. and other, 1995, The Home School Manual, Gazelle P.

<追記>

本号は高乗教授の記念号である。国際通の高乗教授に敬意を表して、「アメリカの教育事情」というテーマを選んだが、かなり個人的な記述になってしまった。筆者は院生の頃、「学級集団に関する研究」という題の修士論文を書いたが、その際に学級における人間関係に関する高乗教授の論文を読んで影響を受けた記憶がある。私が上智大学に移るとき、当時学科長であった高乗教授がわざわざ前任校に挨拶にきて下さった。温厚な高乗教授のゼミにはいつも華やかな優秀な女子学生が集まり、すぐれた卒論を書いていて、私のゼミのモデルであった。これまでのご教示とご厚情に深く感謝したい。